

本授業の主張点

単元を貫く言語活動「くらしの中の和と洋ブック」と教材文『くらしの中の和と洋』の特性を生かし、本単元で到達させたい読みの観点「段落のつながり」の下支えとなる読みの観点カードを積み重ねる豆本作りを行うことで、確かな読みの力に確実に到達できる姿を目指します。

1 単元名 『くらしの中の和と洋ブック』を作ろう 『くらしの中の和と洋』（東京書籍4年下）

2 単元の目標

- ◎「読みの観点」を使って、段落のつながりを考え、内容を的確に読むことができる。
- 習得した「読みの観点」を使って、『くらしの中の和と洋ブック』を作ることができる。

3 評価規準【学力デザイン レベル2より】

- ◎段落のつながりや題名等のキーワード等、これまで学習した読みの観点カード群を活用しながら比較思考型の段落のつながりについて考え、読み進めている。【読】
- 比較思考を働かせ、進んで『くらしの中の和と洋ブック』を完成させようとしている。【関】

4 単元とその指導

(1) 児童観

本学級の児童は、説明文『ヤドカリとイソギンチャク』の学習を通して、「問いの段落」、「題名等のキーワード」、などに着目し、謎解き型の段落のつながりについて気づき、内容を理解する学習を行っている。

本単元に至るまでに、習得を継続している説明文に関する「読みの観点」群を以下に示す。

- A：「題名」に関係することばを文章中から探すことができる。
- B：「主語」に対する「述語」を探すことができる。あるいはその逆ができる。
- C：「問い」を探すことができる。また、それにたいする「答え」を探すことができる。
- D：名詞とそれを修飾することば（かざることば）の関係を理解し、なぜその語句が選ばれているのかを考えることができる。
- E：「～たり～たり」の効果を考えることができる。
- F：「事実」の後に「理由」を述べる等、文と文のつながりについて考えることができる。
- G：「はじめ・なか・おわり」の型で文章全体を区切ることができる。
- H：「なか（本論）」の中をいくつかの「まとめり（段落）」に区切り、「タイトル（小見出し）」をつけることができる。
- I：「接続語（つなぎことば）」を探し、なぜその順序で構成されているのか「段落のつながり」を考えることができる。
- J：「キーワード」を探し、それを使って内容を説明することができている。
- K：「書き出し」と「結び」のつながりについて考えることができる。
- L：「筆者の思いや考え」が表現されていることばを探し、なぜその語句が選ばれているのかを考えることができる。

しかし、学習を終えても、「段落のつながり」について考える機会が十分に確保できず習得は不十分である。「キーワード」を複数並べてその関係を考える等、作品を俯瞰しながら内容をとらえたり、「題名」の意味を考えたり、「書き出しと結び」の呼応を考えたりする言語活動を数多く経験させていかなければならない。

(2) 教材観

本教材『くらしの中の和と洋』は、日本古来からあるもの（「和」）と外国の文化を取り入れたもの（「洋」）の、両方の良さがくらしの中でどのように生かされているのか、について説明した文章である。児童にとって、「衣食住」は生活経験から想起できる身近な題材であるが、それだけに主観的な概念理解にとどまっていることも多い。和室と洋室を対比しながら、それぞれの部屋の持つ利便性（「良さ」）について論理的に展開されている文章に対して、疑問や興味をもって読み進めることができるであろう。この作品から抽出可能な「読みの観点」群は、以下の5つである。

- 〈1〉 題名は「と」を挟んで「和」と「洋」を対比して並べている。その後の説明でもこの対比構造が繰り返されており、対比させながら文章に仕上げることができることを学ぶことができる。(題名は作品を読み解くキーワード)
- 〈2〉 「はじめ・なか・おわり(序論・本論・結論)」で構成されており、俯瞰的に文章の組み立て(構成)を学ぶことができる。
- 〈3〉 「良さ」「ちがい」「和」「洋」など、繰り返し出てくるキーワード(要点)を見付け、「ちがい」がどのように書かれているのかを考えることで、段落のつながりを学ぶことができる。
- 〈4〉 まとまり(段落)の数を考え、仕切る場所を考えることで文章のまとまりをとらえることができる。
- 〈5〉 順序をあらわすことばや「このように」等のつなぐことば(接続詞)をきっかけに考えることで、まとまりがどのような関係で結びついているのか(段落のつながり)を考えることができる。

「はじめ」は、「和」と「洋」という言葉を定義して話題を提示し、「衣食住」の「住」に話題を絞り込み、次に説明する内容を示している。「なか」は、3つの内容に分けられる。「なか1」は「和室と洋室の大きな違い」、「なか2」は「過ごし方の違いとそれによる良さ」、「なか3」は「使い方の違いとそれによる良さ」について述べている。「過ごし方」、「使い方」については、具体例をあげていること、順序に沿って述べていること、観点ごとに対比して述べていることによって、それぞれの良さを説明していることに気付かせることができる。「おわり」では、「和と洋の両方の良さを取り入れて暮らしている」という筆者の主張を読み取らせることができる。「住」についてのまとめや「衣」、「食」についてそれぞれの違いや良さを考えることができる、という新たな課題を読み手に投げかけている。

このようなことから、対比的な表現の工夫を中心にしながら段落と段落の関係が論理的に展開されている。これを4年生の児童が自分なりに自らの表現に生かすことのできる教材であり、「読みの観点」群を「書くことの観点」群に連動させる言語活動を仕組むことが可能な教材である。

(3) 指導観

本単元では、『くらしの中の和と洋ブック(以下『和洋ブック』)』を作る活動を通して、段落と段落がどのような関係で結びついているのか考えさせる(読みの観点「段落のつながり」)ことをねらいとしている。高学年で、「筆者が最も伝えたいこと(要旨)」を「段落の役割」を考えながら読み解く学びを行う上で基礎基本の読みのカードになる「段落のつながり」カードである。「まず」、「つぎに」のような直接的表現により段落がつながっていることを理解するのみならず、対比という思考法によって、一見離れているように見える段落がつながって見えるように理解させることである。対比により、ものの見方や考え方が深まることが期待できる。『和洋ブック』とは、日本人が、「衣食住」の話題や対比法を使って製作する豆本である。豆本の形式を取り入れる良さとしては、ページを繰る度に見開き2ページで和洋の比較した良さが確認できる構成を考えている。例えば、①話題(表紙1ページ)、②和洋の比較1(最初の見開き2ページ)、③和洋の比較2(次の見開き2ページ)、④調べて発見したこと(最後の1ページ)のような構成が取れる。和と洋を区別することにこだわるのではなく、洋を取り入れ、それを和風にアレンジし続ける先人の知恵により日本人の生活が豊かになっていったこと、結果として和洋の区別がつかなくなっていることを「和洋」の概念として持ちながら指導を進めていく。

第0次では、4月から継続して取り組んできたチャンネル日記を教師と共に豆本化し、『ヤドカリとイソギンチャク』で習得を始めた段落のつながりを自分たちの作品の中で整理分類させる。

第一次では、単元を貫く言語活動『和洋ブック』を作る、を設定する。まず、教師自作の『和洋ブック』に対して、児童が意見を出しながら完成させていくことで、『和洋ブック』の作り方を知ったり、完成のイメージを持てるようにする。今の児童の日常生活の中から題材を抽出し、その子なりの経験から「どんな時」に、「どういう人」が和と洋の良さを生かしているのか、架空の外的条件を設定することで考えさせていく。例えば、はしとフォークの両方の良さを①どんな時に、②どういう人が生かしているのか等である。

第二次では、比較思考型の段落つながりを理解させる。教材文から、以下6つの「読みの観点カード群」を習得・活用させることで「段落のつながり」の習得を確実なものにする。A 題名「と」の意味を考える。B 主語と述語の関係を明らかにする、G 文章全体を「はじめ・なか・おわり」の3段構成に分ける。なかの段落は更に3つに分ける。F 和と洋それぞれの良さの具体例を探す。J キーワード(要点)を探す。I-1 接続語を探す。I-2 比較思考によるつながりを探す、L 文末表現を探す、である。

第三次では、「読むこと」で習得した比較思考型の「段落のつながり」を使って、『和洋ブック』を製作する。この活動を通して、「2つのものを対比して考える力」を身に付けられるようにする。完成した『和洋ブック』は、6年生や中学生に読んでもらう。対比的な説明により、分かりやすくなっているかどうかを評価してもらうことで、4年生、6年生、中学生それぞれが段落のつながりをつかむ力が確かに習得できていると実感できるようにする。

5 指導計画（全11時間）

次時	学 習 者		指 導 者		
	意 識	学習活動	意 図	指導及び支援【評価の観点】	
0	チャンネル日記の豆本 を見ると自分たちの構 成もおもしろいな。	チャンネル日記を書き 続ける。	書き慣れさせる。 語彙を拡充させる。 学習者の表現より思考 法を分析する。	・チャンネル日記に継続して取り組ませ、児童作品に 対して「段落のつながり」の視点から分析し、豆本 にして配布する。	
一	1	題名の「と」で考える のは前もやったことが あるぞ。和と洋の関係 を表すのかな。	題名について話し合 う。 教師作成途中の『和洋 ブック』をみんなで完 成させ、学習計画を立 てる。	単元を貫く言語活動を 設定し、学習の見通し を持たせる。	・題名の「と」に着目させることで、対比関係を推測 させる。 ・作成途中の『和洋ブック』を教師が自作しておく。 ・単元を貫く言語活動『和洋ブック』作りを設定することで取材のために教 材文を早く読みたいという学習意欲を持つことができるようにする。【関】
二	2	和室と洋室の違いを 『和洋ブック』にまと めたい。	教材文を通読する。 文章全体を5つに分け る。	文章構成のあらましを つかませる。	・教材文を通読した後、キーワードや段落の結びつき 等、気づいたことを文章に書き込ませる。 ・「住」の和と洋について、どこにどのように書かれ ているかを確認する。【読】
	3	和室と洋室の大きな違 いを豆本『和洋ブッ ク』にまとめたい。	なか1・2・3を中心 に語と語、文と文のつ ながり、形式段落のつ ながりを読み取る。	対比して述べるときの 表現や具体例の書き方 を読み取らせる。	・形式段落ごとに短いことばでまとめ、文章全体に切 れ目を考えさせることで「はじめ・なか・おわり」 の構成をおおまかにつかませる。 ・過ごし方と使い方の違いについて、どんな時にどん な人が良さを取り入れて暮らしているのか豆本にま とめさせる。 ・「なか（本論）」の段落のつながりを理解させる。
	4	過ごし方のちがいをま とめたい。			
	5	使い方のちがいをまと めたい。			
6 本 時		豆本『和洋ブック』の 構成を工夫したいけど、 文章全体はどんな段落 のつながりになってい るのだろう。	「なか」の三つの意味 段落のつながりを読み 取る。	「読みの観点」を使って、 段落のつながりを読み取 らせる。	・段落同士が対比的なつながりを持っていることで伝 わりやすい文章になっていることを理解させる。 あ：まず大きなちがいを述べ、次に具体例を示していること。 い：それぞれの「なか」に対比関係があり、「なか1」と「なか2」にも対比関係があること。 う：題名の「と」が対比を示唆していること。 ・豆本作りを通して、比較型の段落つながりを理解できるようにする。【読】
	7	わたしの『和洋ブッ ク』にも、はじめとお わりをつけたいな。	「はじめ」と「おわり」 段落の表現の工夫を読 み取る。	「おわり」の筆者の主 張と表現の工夫を読み 取らせる。	・「住」についてまとめた上で、次の話題作りをして いることに気付かせる。 ・『和洋ブック』の表紙と裏表紙を考えることで、序論と結論の意味を理解 できるようにする。【読】
三	8	比べるとよく分かるつ ながりを使って、『和洋 ブック』を作ろう。	習得した比較型の段落 つながり等、「読みの 観点」を活用して、『和 洋ブック』を作る。	「読みの観点」を「書 きの観点」として使わ せる。	・インタビューや関連図書、ネットで取材させる。 「表紙」：〇〇（和）と〇〇（洋） 例 みそしるとスープ 「はじめ」：最も大きなちがいは〇〇と言ってよいでしょう。 「おわり」：初めて知ったこと・調べて発見したこと。 ・『和洋ブック』をつくることで「読みの観点」を活用できるようにする。【書】
	9				
	10				
	11	6年生や中学生にも分 かるように伝えられた かな。	『和洋ブック』を届け て読んでもらい評価を 得ることで振り返る。	習得・活用した力を、 日常の言語活動に定着 させる。	・評価のためのアンケートを児童と共に作成する。 ・上級生に段落のつながりを評価してもらおう場を設定することで、自信を深 め、成就感を得させる。【関】

6 本時の学習（本時6 / 11時間）

(1) 目標

- 学習目標
 - ・『和洋ブック』の紙面の構成を工夫しよう。
- 指導目標
 - ・「読みの観点」を使って、比較型の段落つながりを読みとらせる。
- ◇ 評価規準
 - ・5つの読みの観点「主語」「述語」「キーワード」「筆者」「段落」を使って説明文を正確に読むことができる。【読むこと】

(2) 展開

ゴシックは、視点に関わる部分

過程	学習活動	教師の働きかけ(○)と評価(◇)
下積みカード	1 前時までの学習を振り返る。	○これまでに作成した豆本『チャンネル日記』について振り返り、段落のつながり技についてクイズを行う。 あ：問いと答え技 い：事実→具体例の技 う：事実→理由技 え：原因→結果技 お：先を読むほどよく分かる技
	2 本時のめあてをつかむ。	豆本『和洋ブック』に表すと(どんな)紙面の組立てになるのかな。
↑ ↓ 指導目標となる新カード	3 『和洋ブック』の豆本を作る。 (1)豆本のそれぞれの紙面にどんな内容を書くのか考える中で、段落のつながりを説明する。	○豆本を開く1度目と2度目に何が見えるように作ると分かりやすいのかを考えさせる。 ◆段落のつながりが説明できているか。(発言の様子) A段落のつながりを、キーワード等をつかひながら自分なりの論理で説明することができる。 →なぜ、最終段落だけ「和」と「洋」の順序が逆になっているのかを問う。 B段落のつながりを説明することはできているが、手がかりにすることばを探しきれていない。 →「比較」を表すことばにサイドラインを引かせ着目させる。 C段落のつながりを見つけようとするが、ことばで説明するまでにはいたっていない。 →黒板の段落つながり技を見ながら、教師と共に選択させる。
	(2)段落のつながりを説明する上で落とせないことば群を整理することで語彙化する。	○段落のつながりを考えるために、なか(本論)のまとめ(段落)から「キーワード(題名・繰り返し)」、「つなぎことば(接続語)」、「文末表現」等手がかりにすることばを抽出していく。 【児童に着目させたい表現 ※○の中の数字は形式段落】 ①「和と洋」②「住」「良さ」 ③「和室と洋室のちがひ」 ④「まず」「すごす」 ⑤「それに対して」 ⑥「それぞれ」「良さ」 ⑦「たたみの良さ」「しせい」⑧「いすの良さ」「間かく」 ⑨「いすの良さ」「しせい」⑩「いすの良さ」「動作」 ⑪「次に」「使い方」「それぞれ」⑫「洋室」「例えば」 ⑬「これに対して」⑭「このように」 ⑮「衣」「食」「考えることが」 ○なぜ教材文は「和→洋(題名)」、「和→洋(なか1)」「和→洋(なか2)」「洋→和(なか3)」の順番なのかを問う。 ○形式段落③④⑤の役割について話し合わせる。 ○主語・述語、キーワード等の読みの観点を話し合いの中で行きつ戻りつしながら習得させていく。 ○次の観点から自己評価させる。 あ：手がかりになることばを文章から選ぶことができたか。 い：豆本を使って段落のつながりを説明することができたか。 う：自分の「和洋ブック」を作れそうか？ ○「比較型段落つながり」カードをこれから活用しようという期待を持たせる。
↓ カード活用	4 本時を振り返る。	
	5 次時の学習を知る。	